DOBOKU

人のために豊かさや便利さを提供する 土木を、生活のなかに浸透させていくこと。 「DOBOKU×カルチャー」 では、私たちと土木の距離を縮めてくれる、 そんなコンテンツを紹介します。



インフラツーリズム

昨年8月に実施した「東京湾インフラ見学クルーズ」。船で海上から橋梁などインフラ 構造物を見学。子どもからお年寄りまで多くの参加者が楽しんだ。

カ

力にも注目が集まった。

運んだ。 べる場所として休日、家族で出 光 なった。インフラ施設見学は、単なる観 ようという機運が高まるきっかけと 盤の重要性、土木の大切さを再認識し 感」を求める人たちが全国各地に足を 見ることのできない「レア感」や「お得 様々な企画を生み出した。すると、普段 と見学会を実施。更にニーズを受けて 波及する。行政や様々な業界団体が、イ ンフラについて理解を深めてもらおう ルスポ 二〇一一年の東日本大震災も社会基 その人気はほかのインフラ施設にも ット かけ

ジャースポットに成長を遂げた。 ではなく、仕組みなどを学

カルチャー

ヤー

へと進化を遂げている。

葉まで生まれた。人気を集めるように いる。「インフラツーリズム」という言

う認識だったからこそ特別に関心も向

える基盤であり、当たり前にあるとい 般の人にとってもインフラは生活を支 施設を訪ねるツアーが若い人やファミ

業者向けの現場見学会が多かった。一

なったのはここ数年である。かつて

ムや橋梁、高速道路などインフラ

-層など幅広

い世代に人気を集めて

無料や低価格で、お土産までもらえる ず、レジャーの一つとして人気を呼んだ 生まれたのは十年ほど前だろうか。ま チャーの位置づけから少しずつ変化が にはマイナスのイメージを持っていた で公共事業の見直しが迫られた際など のが「工場見学」だ。景気の低迷もあり、 にさせていたインフラ構造物。サブカル 人も多かったのではないだろうか。 そんななかでも一部のファンを夢中 たのだろう。むしろ平成不況

が見え始める。現地で配布される「ダム向けた。なかでもダムにブームの兆し で取り上げられるとダムそのものの魅 カードの収集に熱狂する姿がメディア たな分野としてインフラ施設にも目を 工場などの施設見学が注目を集めた。 ード」もきっかけの一つとなった。 その楽しさを実感した参加者は、新

索できるサイトを運営。来訪者の検 知していたが、その情報を集約させ、 る。これまでは個々に施設見学会を告 を立ち上げたことも追い風となって ポータルサイト「インフラツーリズム」 ジャーとして定着した。国土交通省 ていった。そして、そのブームは今や イベントの拡大が「インフラツーリズ 地道な努力と時代のニーズに対応し 出し、自然誘発的にブー ム」という新たなムーブメントを生み こうして様々な組織の長きにわ ムへと発展 たる 検 が



会員と一般参加者が地下の巨大トンネルを歩いた「神田川・環状七 号線地下調節池」の見学会。